

経

験

山の宿へきて数日経ったある夜、「特等室」の雨戸を閉めに上がってきたおかみが、戸をくりかけて、「先生いい月が出ました」という。外していた眼鏡をとって、急いでいってみると、川向こうの山の上に、十三夜の月がかかっていた。松の梢越しにそれが見えた。こういういきさつで山の月を見ることができたことに、わたくしはまず感動した。それからおかみは、日の出の位置と月の出の位置とが、季節の移りゆきにつれて入り代る、ということをいった。月はそのとき窓の右手に見えていた。そのころの日の出は、左手の方からであったが、やがて月の出の位置に近づき、ついにそれを通り越して、さらに右手に移るといった。

天体運行の法則からいえば、不思議はないであろうが、山峡に住む人の経験にもとづく話として、たいへん面白いと思った。

経験といえば、ここへ持ってきて読みつづけている、森有正氏の『バビロンの流れのほとりにて』に書いてあったことを思い出した。森氏の行文には、わたくしは十全の共鳴をもってついて

ゆける。そのことをまた有難いとも思っている。この日読んだ、やはり「経験」のことを書いた文の中に、つぎの一節があった。

人間はいつも中間に生きている。スコットランドのある古譚を想い出す。冬の嵐の真夜中、城の一室で武士たちが火をたいて夜伽をしていると、一羽の小鳥が外の暗闇から部屋に飛びこみ、一瞬の後、反対の側から再び闇の中へ消え去った。王様がいった、「人生とはこういうものだ」と。

人生とはこういうものだ——という短いことばは、王様の経験の終結であった。それゆえに、それは生きた思想としての重みをもつ。おかみの話をこれと比較することはできないが、雪に降りこめられて何日も訪れる客のないこともある山映の古宿で、長年にわたり自分の感覚でたしかめてきた経験が、その話の裏付けとなっていることはまちがいない。わたくしの心をつよくとらえた理由も、ここにあるのであろう。

(四四・二)